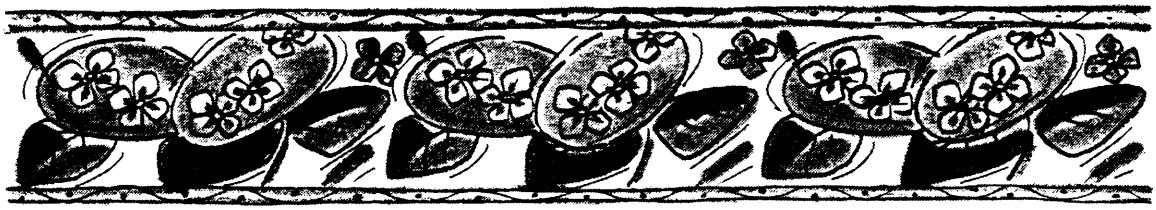


随想・五〇〇号に寄せて

「視聴覚教育」の進歩に深く豊かな哲学を

東京大学教育学部教授
吉田章宏

「視聴覚教育」、私には、たいへん懐かしい響きをもつ誌名です。初めて貴誌に書かせていただいたのは、一九六四年の「日本映画教育協会」時代のことで、私は大学院生でした。書店の店頭にその号の貴誌を見付けたときの喜びを思い出します。波多野完治先生の研究会での報告の文章でした。あれから二五年、長い時が流れました。

貴誌の創刊は一九四七年とのこと、以来、一号また一号と心のこもった編集実務を重ねて来られて四二年、そして、五〇〇号です。ご苦労の歴史の重みに感動します。

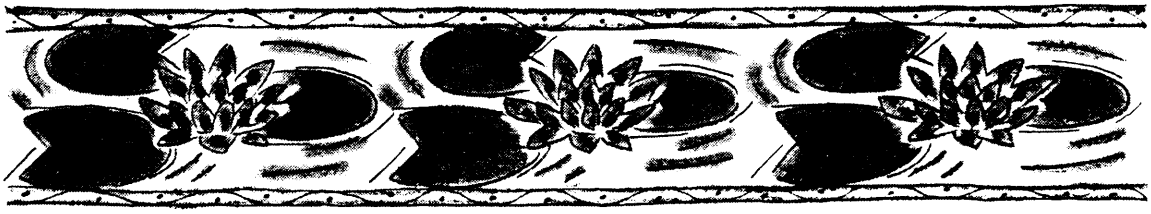
ナトコ映写機を抱えて頑張った戦争直後の頃のことを、視聴覚教育の先輩の先生方から伺うことがよくあります。私は、そうしたご苦労をなさった先生方の恩恵を受けた生徒、「六三制」「新制中学」第一期生の一人です。戦後日本の教育と共に発展してきた「視聴覚教育の進歩」の目覚ましさに、驚嘆の念を禁じえません。

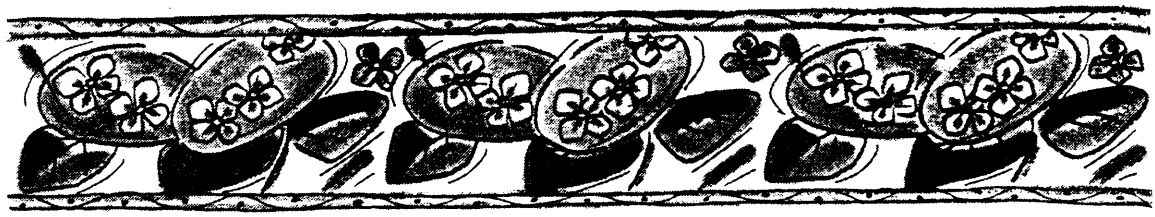
「視聴覚教育の進歩」と申しました。「進歩」は、誰の目にも明らかです。エレクトロニクス技術の発展、新しい技法の開発、多種多様なメディアの登場、など、など、確かに、それは、言うまでもなく、「進歩」です。しかし、ふと思います。もしその「進歩」の及ぶ範囲がそれらに限られ、それらに尽きたとしたら、それは「技術」の進歩とは呼べても、それは「視聴覚教育」の進歩、「教育の進歩」と呼ぶには、まだ足りない何かがあるのではないだろうか、と。

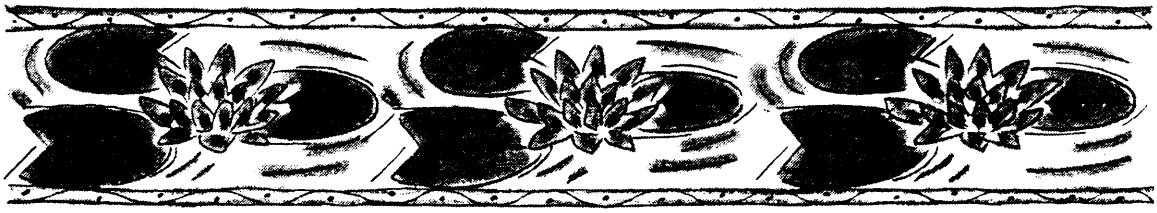
「視聴覚教育」は、多様なメディアとそれに適した技法で「教育する」ことである、と普通考えられているように思われます。

しかし、「教育する」とは何でしょうか。

私は、私なりの長い経緯を経て、それは「生きられる世界を共有する」ことだ、と考えるようになりました。人間ひとりひとりの生きている世界は、時間も空間も、誰にせよ、限られたものです。





人間は誰も、自分の生まれる以前の過去の時代にも、自分の死んだ後の将来の時代にも、生きることはできません。旅人として、さまざまな社会文化を見聞することはできても、私達には身体がたった一つしかない以上、この身体がその時々に占めている空間しか経験できません。教育は、私達の生きている世界のもつ限界を広げてくれます。一つは、見聞を広げてくれることによってです。が、さらに、他者の生きている世界に私達を近づけ、他者の生きる世界を共有させることによってです。

ベラ・バラージュは、かつて、その著『映画の理論』（学芸書林）の中で、「映画を見る」経験をとらえて、「われわれは映画の中にいる！」と表現しました。私達には、映画によって、映画の世界に入って、その世界の中で、他者の世界を生き、他者の世界を共有し、深く豊かな経験をすることが可能になりました。映画というメディアが、そうした経験を可能にしたのです。映画のお陰で、人間には、それ以前の人間には不可能であったような多種多様な他者の世界を生きる経験をすることが可能になったのです。このような、人間経験の変化は、実は、映画の場合に限られてはいないでしょう。新しいメディアの開発のたびに、それまでには考えられないような豊かな経験が、私達人間に、可能になるのでしょう。そうした新しい人間経験の可能性が、総てのメディアと技法に即して、これから詳しく明らかにされて行かなくてはなりません。そして、そのような豊かな経験を可能にする「視聴覚教育」がさらに新たに開発されて行かなくてはなりません。それら可能になった豊かな経験のお陰で、老若を問わず、多様な世界を豊かに生き、それゆえに、ひとりひとりの人間の生きる世界が更に深く豊かになり、こころ豊かな人々によってこの世が満たされるようになった時初めて、「視聴覚教育は本当に進歩した」と言えるのではないでしょうか。「視聴覚教育」にまだ足りないところがあるとすれば、それは新しいメディアによって開かれてくる豊かな人間経験の可能性の解明とその現実化の探究だ、そんな風に私には思われるのです。フランスの現象学者メルロ＝ポンティーは「映画と新しい心理学」（『意味と無意味』みすず書房／所収）という論文のなかで、「映画は何よりもまず技術的な発明であって、そこでは哲学は何ものでもないのだ。……本当の映画が作れるようになるためには、一度発明された技術的道具を、再度発明された道具でもあるかのように芸術的意志によって改めて捉え直さなければならない」（同書八六ページ）と書いています。そのためには、深い哲学が必要です。新メディアにより可能となる人間経験の解明と、それに基づく、人々の生きる世界を豊かにする『視聴覚教育』の実現、普及、一層の深化と発展を心からお祈りいたします。